

第 25 回クラシックを楽しむ会

2015 年 9 月 27 日 (日) 18:00~21:30

歌劇「オテロ」(ヴェルディ)

会場等：サン・カルロ劇場 (ナポリ)
シェクスピア生誕 450 年記念公演
(2014 年 4 月 22 日)

楽団等：サン・カルロ劇場管弦楽団、
同合唱団、同児童合唱団

指揮：ニコラ・ルイゾッティ

演出：ヘニング・ブロックハウス

出演	マルコ・ベルティ	オテロ (ベネチアの将軍)
	リアンナ・ハロウトウニアン	デズデモナ (オテロの妻)
	ロベルト・フロンターリ	イアーゴ (オテロの部下)
	アレッサンドロ・リベラトーレ	カッシオ (オテロの副官)
	チェ・スンピル	ロドヴィーコ (ベネチアの大使)
	ヴェンツェスラフ・アナスタソフ	モンターノ (前キプロス島長官)
	アンナ・マラヴァージ	エミリア (イアーゴの妻)
	その他	



マルコ・ベルティとリアンナ・ハロウトウニアン

あらすじ

15 世紀末、ムーア人のベネチア共和国将軍オテロは、領有したキプロス島の近海でトルコ艦隊を撃破し、キプロス島の総督に就任する。オテロの存在で出世できなくなった旗手イアーゴは、オテロが美しい白人の新妻デズデモナを深く愛していることにつけこみ、自分の妻をも利用して彼の失墜を企む。そしてオテロはデズデモナの不貞を信じ込まされ、デズデモナの言葉も聞き入れず手にかける。そして、すべてを知ったオテロは妻の死を嘆き自ら命を絶つ。

サン・カルロ劇場

ヨーロッパで現役最古のサン・カルロ劇場は、1737 年にブルボン朝ナポリ王国初代王のカルロが建造。ナポリの栄光と共に、金の装飾、ブルボン家の豪華な青色の布張装飾でヨーロッパ随一の劇場と言われた。当時のナポリはいわばヨーロッパにおける音楽上の首都で、チマローザ、パイジエツロなどが活躍。1816 年に焼失するが同年に



サン・カルロ劇場側面(正面は左面)、右は王宮側面(正面は右面) 2014.7 Google

再建。現在の建築はこの再建建築と基本的に同一。再建後、ロッシーニが、続けてドニゼッティが王国の王立オペラ劇場付作曲家・兼音楽監督を務め、多くの名歌劇を作曲した。

第 26 回クラシックを楽しむ会(予告)

タイトル：歌劇「ばらの騎士」(R.シュトラウス)

10 月 18 日(日) 17 時 30 分開場、18 時上映開始

ザルツブルク音楽祭 2014、R.シュトラウス生誕 150 年記念公演。現代最高の出演者陣と見事な演出。秋の夜長をじっくり楽しみましょう。

11 月以降は、パヴァロッティの「リゴレット」、オペラ座バスターコ劇場の「夢遊病の女」などを予定。

【時と場所】

15世紀末、キプロス島

【登場人物】

オテロ	ムーア人でヴェネツィア領キプロスの総督（テノール）
イアーゴ	オテロの旗手（バリトン）
カッシオ	オテロの副官（テノール）
ロデリーゴ	ヴェネツィアの貴族（テノール）
ロドヴィーコ	ヴェネツィアからの使者（バス）
モンターノ	キプロスの前総督（バス）
デズデモナ	オテロの妻（ソプラノ）
エミリア	イアーゴの妻で、デズデモナの女中（メゾソプラノ）

【第1幕】キプロスの港

激しい嵐。島の住民が待ちわびる中、オテロに率いられた船団が帰還する。敵のトルコ艦隊は海の藻屑になったとの勝利報告に住民は歓喜する。カッシオが副官になったことを妬むイアーゴは一計を案じ、酒に弱いカッシオにワインを無理強いする。カッシオは悪酔いし醜態を演じたばかりか、喧嘩の仲裁に入ったモンターノを傷付ける。騒ぎを聞いたオテロが戻ってくる。彼は即座にカッシオを罷免、群衆に帰宅を命ずる。舞台にはオテロと妻デズデモナだけが残り、愛情を確かめ合う美しい二重唱が歌われる。

【第2幕】庭園に面する城の一室

副官の座を失ったカッシオに、イアーゴは「デズデモナに取成しを頼め」と提案する。オテロが登場。イアーゴは、庭園でカッシオとデズデモナが歓談している様子を、さも二人が不貞を働いているかのようにオテロに信じ込ませる。室内に入ってきたデズデモナはカッシオの赦免を夫に願うが、心中疑念をもつオテロは耳を貸さない。デズデモナが落としたハンカチは女中エミリアが拾ったものの、その夫イアーゴが脅迫の末手中に入れる。イアーゴとオテロ二人だけが舞台に残り、オテロは「不倫の証拠を見せろ」と迫る。イアーゴは、「カッシオが夢の中でデズデモナを求めている」と作り話をし、また、デズデモナが愛用していたハンカチ（それはオテロからの彼女への贈り物だった）を、カッシオが持っているのを見た、と吹き込む。激怒したオテロは復讐を誓う。

【第3幕】城の大広間

デズデモナは事態の進展に気付かず、またもやカッシオの赦免をオテロに願い出て斥けられる。オテロは「自分が贈ったハンカチはどこへいった？」と詰問。もちろん彼女は答えられず、当惑しながら去る。イアーゴが「今カッシオと話をするので物陰で見ると」オテロに勧める。巧みなイアーゴの話術に乗ったカッシオは、自分の恋人ビアンカとの顛末を陽気に語るが、遠くで聞いているオテロは、デズデモナとの恋物語をしていると思い込む。例のハンカチはイアーゴがあらかじめカッシオ宅に落としておいたのだが、そうとは知らないカッシオは「ところでこんな素晴らしいハンカチを拾った」などとイアーゴに披露、遠目に見ているオテロは、いよいよ不貞が証明された、と確信してしまう。オテロとイアーゴは相談の末、デズデモナはオテロが殺めること、カッシオの始末はイアーゴが付けることを決定する。

ヴェネツィアからの使者ロドヴィーコとその一行が来航し、キプロス島の要人が集合する。オテロはヴェネツィアへ帰任となり、後任の総督はカッシオとなることが布告される。嫉妬心に燃えるオテロは公衆の面前で妻デズデモナを面罵し、自分は憤怒のあまり気絶する。

【第4幕】デズデモナの寝室

デズデモナは床に就く用意をしている。ここ数日の夫の言動から不吉な予感を覚える彼女は「もし死んだら婚礼の衣装で身を包んでほしい」と、女中エミリアに依頼する。オテロが寝室に現れ、カッシオとの姦通を詰責する。デズデモナは抗弁も空しくオテロに絞殺される。エミリアが「カッシオがロデリーゴを殺した」と急を告げに戻ってくるが、デズデモナが殺されているのを発見、驚いて人々を呼ぶ。エミリアは「夫イアーゴが私からハンカチを奪った」と証言、ロデリーゴが死ぬ前に陰謀の全てを白状した、との事実も明らかになる。形勢不利とみたイアーゴは遁走する。いまや全てを悟ったオテロは短刀で自刃し、妻の遺体に最後の接吻を求めつつ息絶える。

*このページの内容は基本的にウィキペディア「オテロ（ヴェルディ）」のコピペである。

参考資料

ヴェルディの「オテロ」

ヴェルディは「アイダ」の大成功後、晩節を汚さないよう16年間故郷ブッセート近くの農園で隠遁生活を送っていたが、すぐれた台本作者**ボイト**達の熱心な働きかけで、70歳になってから「オテロ」の作曲に着手した。作曲開始から4年後の1887年、ミラノ・スカラ座で当時の最高の顔ぶれをそろえて初演、圧倒的な大成功を収め、ヴェルディの最高傑作となった。ボイトのすぐれた台本はシェイクスピアの悲劇をほぼ完璧に表現している。



台本作者ボイト

シェイクスピアの「オセロ」

歌劇「オテロ」(Otello)の原作「オセロ」(Othello)はシェイクスピアの四大悲劇の一つで副題は「ヴェニスの子守人」。もっとも古い上演記録は1604年。

ヴェニスの軍人オセロが、旗手イアゴの奸計にかかり、妻デズデモナの貞操を疑い殺すが、真実を知ったオセロは自殺するという話で、歌劇はほぼ原作通り。

「オセロ」の原典は1566年ヴェニスで刊行されたツィンツィオの「百物語」第3編第7話である。この物語の登場人物はデズデモナ(ギリシャ語で「不運な」の意味)以外はムーア人、旗手などと呼ばれていて名前はない。



「オセロ」表紙

物語の舞台と時代背景

キプロス王国成立までのキプロス島

キプロス島は東地中海最大の島で前15世紀には古代エジプトの支配下に入り海上交易の拠点として繁栄。その後さまざまな勢力が交差した。12世紀からは十字軍に翻弄され、十字軍の主力テンプル騎士団の拠点として1192年、フランク人がキプロス王国を建国した。その後、イスラムのマムルーク朝の属国に甘んじ、ネツィア共和国商人に経済を握られるようになった。

北キプロス・トルコ共和国にあるキレニア城は十字軍が築城しヴェネチア共和国が16世紀に改築したものである。

十字軍とヴェネツィア共和国

強大な海軍力をもつヴェネツィアは十字軍を利用して莫大な富を得、暴虐を極めた第4次十字軍とともに略奪、殺戮、凌辱の限りを尽くして東ローマ帝国を滅ぼし、ライバルのジェノヴァ艦隊を破って14世紀末までに東地中海の覇者となった。しかし、東からオスマン帝国が勢力を伸ばし、ヴェネツィアはエーゲ海の要衝ネグロポンテを1470年に失った。

なお、当時のヴェネツィア海軍は全てヴェネツィア人であり、物語のようなムーア人の総督はありえない。

15世紀末のキプロス王国と女王カタリーナ

キプロス王国では後継者争いの中でヴェネツィア貴族の名門コルナーロ家が影響力を増していた。キプロス王国のジャック2世はコルナーロ家の娘カタリーナ・コルナーロを妻にして王位に就いたが、男子を得た直後に病死、その子も夭折してカタリーナが女王となった。1489年、カタリーナはキプロスを母国ヴェネツィアに譲渡させられた。



キプロス島の位置



キプロス島のキレニア城、左の円塔は16世紀に改築



キプロス女王カタリーナのヴェネツィア帰還